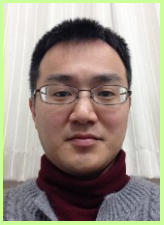
２０１９年初春号　　日本メノナイトブレザレン教団　伝道委員会　　第13号

MB伝道ニュース

開拓伝道のビジョンを語る【15】



竹田　満師
教会学校委員会委員長
（中国地区担当牧師）

開拓伝道のビジョンに関して、初めに「我々は何を伝えるのか」という伝道の内容そのものをヨハネの福音書とヨハネの手紙第一から確認し、次に「我々はどうやって伝えるのか」ということを考え。

A. 我々は何を伝えるのか

1．我々は「神のことば」を伝える　「イエス・キリストの名を信じる」「互いに愛し合」

伝道の内容とは「神のことば」であると定義できるだろう。「神のことば」とは神の意図や意思を表現するものであり、それは神の命令と言い換えられる。神の命令とは、Ⅰヨハネ 3:23 によれば「イエス・キリストの名を信じ」ることと「キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと」である。我々は「イエス・キリストの名を信じること」を伝え、「互いに愛し合うこと」を伝えるのである。

2．イエス・キリストの名を信じる　～　互いに愛し合う

イエス・キリストの名を信じる者は神の子として生きる（ヨハネ 1:12）。そして、神の子すなわち神から生まれた者は神を愛し、同じく神から生まれた他者をも愛する（Ⅰヨハネ 4:21,5:1）。つまり、イエス・キリストの名を信じることは神への愛と互いに愛し合うことに通じている。こうして、伝道の内容である「イエス・キリストの名を信じること」と「互いに愛し合うこと」とは連なっていると言うことができる。

B. 我々はどうやって伝えるのか

1．我々は「互いに愛し合うことを通して」伝える

Ａにおいて、伝道の内容は「イエス・キリストの名を信じること」と「互いに愛し合うこと」であることを確認し、さらにそれら二つは連なっていることも見た。これらの伝道の内容に「我々はどうやって伝えるのか」ということが既に含意されている。すなわち、我々が神のことばを伝えるという伝道の姿は、互いに愛し合うことを通して表現されると言える。それはヨハネ 13:35 の示す通りであり、互いの間に愛があることによって、我々がキリスト者（キリストの弟子）であることを周囲は理解するのである。

2．「互いに愛し合う」　～　神の愛が表される

我々が神のことばを伝えるという伝道の姿は、互いに愛し合うことを通して表現されると言える。それはⅠヨハネ 4:11,12 でも示されている通り、私たちが互いに愛し合うことにおいて、神が我々の関係に示され、神の愛が我々の関係に表されるからである。神を見た者はいなくとも、我々の互いに愛し合う生き方を通して、人々は神の愛を知るのである。

以上のように、「我々は何を伝えるのか」と「我々はどうやって伝えるのか」についてヨハネの福音書とヨハネの手紙第一から考えた。我々は互いに愛し合うことによって神を伝えて生きる。しかし、実際にはこの生き方は容易ではない。「あなたが私を愛してくれるなら、私はあなたを愛そう」と言い合って平行線を辿るのが我々の現実である。他者に愛を要求することは、残念ながら愛とは言い難いだろう。愛し愛される、尊び尊ばれる相互関係は、互いに要求することからは生まれない。一方で「愛そう」と努力し続けて、疲れ果ててしまう場合もある。そうした厳しい現実であるけれども、他者を尊ぶこと（他者との関係）を全く諦めたり、自分が壊れるまで他者を尊ぼうとする両極端で捉える必要はないと個人的には考えている。関わっている人を「みな」等しく尊ぶことは難しい。それでも特定の「誰か」との関係の中で神の愛を表して生きることはできると私は信じる。なぜなら、他者を尊ぶことのできる根拠は我々にあるのでは

なく、神にあるからである。（Ｉヨハネ4:7～16）。神が我々に示した「誰か」を尊ぶ生き方をしようと試行錯誤をする、まさにその状況において、開拓伝道は始まっていると私は信じるものである。

ＭＢ伝道フォーラム報告

報告者：田畑雅紀伝道委員長

先日の２月２日(土)にＭＢ宣教センターにて、ＭＢ伝道フォーラムを開催しました。６０名の会場を準備していましたが、子どもも含めて７４名ほどの参加者が与えられ、廊下で聞く方もでるほどの盛り上がりでした。皆さんの関心の高さに励まされました。

今回の企画は、宣教の原点を学ぶために、同じ福音宣教の困難さを共有し、多くの実を得ているユダヤ人クリスチャンのデービット・トゥルーベック牧師をお迎えして、同胞に対する熱い宣教の思いと、宣教の実践を語っていただきました。彼はイスラエル最大のヘブライ語を話すコングリゲーション(教会)である、テルアビブのティフェレット・イェシュアで副牧師をしています。

本大会の始まる前日に、シャバット(安息日)ディナーを持ち、彼らの宣教の最前線を体験させていただきました。ユダヤ人たちは、正統派であっても世俗派であっても、安息日が始まる金曜日の夕食をともにする習慣を持っています。毎週家庭に友人や知人を招き、食事をすることを通して、信頼関係を深めることが宣教のかぎであるとのことでした。

日本の文化も本来は、食事に友人を招くという家庭を解放するものを持っていたのですが、核家族化の中であまり見られなくなりました。しかし、ここにかぎがあることを多くの宣教の実践報告の中で見ることができます。昨年シリーズで紹介した「家の教会ミニストリー」でも、牧場という少人数の単位で定期的に集まり食事を共にすることを土台とした関係作り伝道でした。

また、彼らが同胞だけなく、日本人をはじめとした諸国民の宣教に重荷を持つ姿を通して、本来的にユダヤ人が神様の祝福を全世界にもたらす器とされたことと、終わりの時代にユダヤ人が全世界に出て福音を伝える働きが預言されていることを強く思わされました。私たちの地域教会という狭い視点から、キリストの再臨に向けた全世界大の約束の成就に目を向けたときに、神様が生きて働いておられる実感が得られと考えています。

午後は、福音宣教の働きに関わっている５人の若い世代に、実践の報告と今後の宣教の可能性について語っていただきました。一人目は、いずみホープチャペルの田畑望兄で、昨年約１年間のイスラエルでのボランティア経験を通して、「イスラエルの執りなし」についてでした。二人目は、桑名キリスト教会の岡本望姉で、昨年１年間の「Ｃ国に留学生として遣わされて」でした。三人目は、土山キリスト教会の西尾洋兄で、「神学生として」の召命から始まり、主から与えられている働きでした。第四番目は、昨年開催された日本青年伝道会議に出席した２名の青年（いずみホープチャペルの福森宣道兄と尼崎キリスト教会の狩野優人兄）からの「受けた恵みとチャレンジ」でした。彼らの報告を通して、多くの若い世代が、主に用いられることの醍醐味を味わい、これからの福音宣教に用いられることを願ってやみません。今後もこのような企画を継続し、宣教の思いをみなさんと共有したいと思っています。更には、遠方教会や海外ともネットワークでつなぐことでリアルタイムに参加できるものになっていくでしょう。

発行：日本メノナイトブレザレン教団　伝道委員会
〒563-0032　大阪府池田市石橋 2-17-10-B　TEL：072-762-5731
発行者：田畑雅紀（伝道委員長）　　編集者：河野和雄（広報担当）